資料２

北海道における縄文世界遺産の拠点形成方針（案）の策定について

拠点形成方針（素案）と、第１回及び第２回の懇談会における各委員のご意見を関連付けて整理。**太字部分が第３回懇談会におけるご意見。**

北海道における縄文世界遺産の拠点形成方針（素案）

１　経過

道では、これまで「北海道・北東北の縄文遺跡群」における道内６構成資産及び１関連資産(以下「道内資産」という）の活用について、次のとおり検討

- 令和３年３月　「北海道における縄文世界遺産の活用のあり方」策定
  ～ 世界遺産登録の効果を北海道全体に波及させ、地域の賑わいの創出に繋げるための取組の方向性を整理
- 令和５年３月　「北海道における縄文世界遺産の拠点機能のあり方」策定
  ～ 本道における縄文遺跡群の保存と活用を図るための「保全」、「教育」、「普及」、「情報発信」、「誘客」、「交流」及び「研究」の７つの機能について整理
- 令和５年度　　道内資産の所在する市町と意見交換
  ～ 市町からは、情報発信や誘客など、各市町と道による一体的な取組の必要性などについて意見あり

＜主な意見＞

（永原委員）

- 議論を総論と各論に分け、総論としては、拠点機能として世界に発信していく縄文のメッセージが何か、これを機にきちんと固めるべき。
- 日本について注目が集まっている言葉のひとつは「Zen(禅)」。縄文は「Zen(禅)」と同じぐらい世界にインパクトを与えられると感じた。この現代的意義に、具体的にどういった言葉を使うのかについては、今後検討していく必要がある。
- **私たちはストレスとどのように向き合うかということで、様々なライフスタイルが提案されているが、縄文文化から学べることが、今の私たちを助ける道標になるのではないかと思っている。**
- **縄文は「Zen(禅)」と戦える概念ではという話があった。なぜ「Zen(禅)」が世界的に受け入れられたのか。禅は仏教の一部として受け入れられたわけではない。宗教や文化の壁を越えた普遍性があるからこそ受け入れられた。その点で、縄文と似ていると考える。**

（水口委員）

- 縄文世界遺産をどうしたいかという将来像をきちんと検討すべき。
- 精神性みたいなものに触れて、ちょっと考え直すとか、気づくようなことを、観光分野ではトランスフォーメーションと言っている。ここに来て、文化に触れて内面が変わった。なにか違うなと思うようになったみたいな場所になれれば良い。そのために、自然環境や産業にも触れる必要があるし、そのための仕掛けも考えなければいけない。

（西山委員）

- 阿部特別研究員の話（縄文世界遺産が現代に伝えたい意義は「人は自然に支えられている。日々の生活の中で、食料や生活素材を与えてくれる『自然に感謝する』という価値観を広める。」ということ。）に同感。また、永原委員が言った、この縄文が発信しようとしているメッセージが「禅」に匹敵するという言葉にすごく反応した。

（小林委員）

・　北海道が描くマスタープランは、既存の価値の展示と学習をつなぎ合わせたものではなく、地域の自治体が抱えている課題、現実的な社会といかに結びつけながら、縄文の価値を次の世代へとつなげて花を咲かせていくことができるかが重要と考える。

・　北海道の価値そのもの、あるいは自然遺産をどうするか、それから次世代を作る、街に住んでいる人だけではなく、その街に住んで何かチャレンジしたいという人と、世界の投資家とネイチャーポジティブのようなことを考えている人たちとマッチングさせる、それぐらいの幅でビジョンとマスタープランを考えていく意味と価値があるのではないかと思っている。

２　基本的な考え方

➢　全体を統括する拠点機能を、札幌圏（環境生活部縄文世界遺産推進室）を中心に強化

➢　広域に分布する道内資産を中心とした周遊の促進､地域活動等を支援する機能の　発揮･強化に向けて、道央エリアと道南エリアを設定し、それぞれに拠点を形成

＜主な意見＞

（西山委員）

・　エコミュージアムを作ることは、コアとサテライトの関係性、ネットワークを作ること。エコミュージアムは、地域に点在しているものを、元からある場所に置いたまま保存しながら、それを訪れる人は自分たちが地域の中を渡り歩いていく。地域全体が展示室で、そこに展示されている遺産を展示物と見立てて、見てもらう。そのストーリーを理解しようというのがエコミュージアムの考え方。

・　エコミュージアムのコアミュージアムの考え方は、必ずそこに学芸機能を持つこと。システムとして、興味を持った人、より深い興味を持った人にも応えていけるようにする。普通のお客さんは普通のガイドさんをお願いし見て廻る。ガイドさんが困るような質問がある人には、コアミュージアムの学芸員カウンターで学芸員が答える。または、少々時間をかけて、学芸員が調べて答える。エコミュージアムとは観光システムではなく博物館システム。だから、拠点については、学芸機能に関する検討が大切なのではないかと考えている。

・　コアミュージアムは、道南エリアの拠点を南茅部において形成すると想定した時に、観光的なアクセスを考えると、最寄りの新幹線駅や函館空港のような場所に近い方がよいが、そこに情報センターのみ設置して、学芸機能は南茅部にもたせるなど、学芸機能と縄文を知りたいという様々なニーズへの対応をどのように繋いでいくのか、システムを考える必要がある。

・　リニューアルオープンする道庁赤れんが庁舎の展示で縄文に興味を持った方々に向けて、本庁等の学芸機能をどのようにリンクさせるかなど、全体システムをどのように構築していくのか、役割分担をどうするのか。

・　個々の自治体にある構成資産のガイダンス施設とどのように連携していくのか。それぞれのガイダンス施設に在籍している、個性を持った学芸員の方々を活かすシステムをどのように構築するか、ということを真剣に考えたい。

・　萩のまちじゅう博物館というエコミュージアムでは、NPO 萩まちじゅう博物館を同時に立ち上げ、市民学芸員のような者を一生懸命育成している。もし、北海道における縄文世界遺産のようなレベルであれば、財団のようなものを外部に立ち上げ、それにDMOのような機能を持たせるとよいのではないか。

・　官民・公民の得意技を活かして、一番ふさわしい組織体制を構築する必要がある。それは指定管理ではあり得ない。コンセッションなどあるが、そういう経営体制、自治体や民のニーズをしっかり酌み取って検討していくべき。目的意識を維持していきながら運営していく組織体はどうあるべきか、ということ。現在は 10 年前と全く状況が異なる。指定管理など、官が丸抱えで進めていくような状況ではない。

（小林委員）

・　エコミュージアムは、意義深い拠点とサテライト、地域住民がタッグを組み、活動や運営をしていこうという考え方。木野委員が言ったのは、拠点とローカルな拠点、そういうものの組み合わせで道南エリアが、世界に光るようなものにしていくことかと理解した。

・　拠点機能を本庁にという話。場所として本庁は永続するかもしれないが、部署が改廃されるなど、行政組織は永続ではないので、拠点は外部組織にする考え方もあるのではないか。行政組織もトップの意思で変革されていくし、縄文世界遺産推進室のような組織が永続するということもないので、札幌での拠点形成についても、行政組織と結びつけない方がよいと感じた。

・　今後、拠点を整備、維持していくとき、道の予算が減少する中、どのように拠点を整備し、20 年 30 年維持していくか、についても併せて考えていく必要がある。世界や日本の投資家から資金を呼び込むなど、公民連携を考えながら拠点の整備を進めるということも、頭の片隅に置いておく必要がある。

・　国では、今まで、霞ヶ関で一つのルール、基本的な方針などを決め、それを各都道府県や市町村で展開してくれと言ってきた。しかし、一つのルールですべてに対応することには限界があるのではないか、予算のことも含めて。そこで、拠点は霞ヶ関であるが、市町村の理由・事由によって、ローカルハブと表現しようという考え方になってきている。北海道の縄文世界遺産についても、拠点を道央圏におくが、ローカルハブは多くあってもよいのではないか、という前提で考えると、道南拠点のほかに、道北や道東も可能性がある。ハブとローカルハブ、その事由によってローカルハブの内容、特徴は変化して構わない。そういう考え方もありうるのではないかと思った。

（水口委員）

・　やはり民間の力を導入した方がよい。その場合には、南茅部では様々な実績があり、際立っているところがある。南茅部の拠点においては、そのような運営の仕方で成功例を積み重ねていき、他のエリアに伝播していく、そのように進めていくことが現実的で早いのではないかというようにイメージしている。

3　拠点形成の方向性

➢ 全体を統括する総合調整機能

- 道内資産全体を統括する拠点機能を、縄文世界遺産推進室を中心に強化
- 道内資産全体の保全と活用の推進、全体のブランディング、マーケティング等を　展開
- 北海道博物館や道立埋蔵文化財センターといった道の専門機関、道内資産が所在する市町や関係団体等との連携を強化

＜主な意見＞

（西山委員）

- 拠点形成のハード・ソフト整備には、その全体の方向性をしっかりと示すマスタープランが必要。マスタープランとは、計画ではなく、5 年後か 10 年後か 100 年後かに、こういう姿に向かって進みたいという将来像であり、来訪したいと思っている方々に持って欲しいディスティネーション・イメージ。関係者間でも議論してイメージが共有されることも必要。
- ターゲットは日本人よりは、外国人が分かりやすいのだろう。その効果が出たら、5 年 10 年すれば、外国人がこんなにすごいっていうのはなぜと言って、日本人が来ると思う。
- もうひとつのターゲットは地元でない高校生。それが外国人に匹敵する我々が必死に伝えたい相手。

（田代委員）

- 道中心に拠点を形成して、国内外の様々な機関と連携していくことは非常に難しい点もあるように思う。日本においては奈良文化財研究所や文化財防災センターといった国内の文化財関係機関、さらに ICOMOS（国際記念物会議）や ICCROM（文化財の保存及び修復の研究のための国際センター）と連携していく必要がある。

（永原委員）

- どのような方々を、どれ程人数を受け入れるかという地域のキャパシティーをきちんと設定することが大切。それをせずに、「より多く受け入れたい」という考えで進めると、観光の安売りや地域の疲弊が起きる。そのため、どのような方々に来て欲しいのか、数なのか、質なのか、きちんと足並みをそろえた上で、プロモーション等を進めることが大事。

（小林委員）

- 縄文文化の持つ本質的な意味を再確認しつつ、どの内容をどの世代、どの世界、どのような層に伝えるかが重要である。

➢ 道内資産を中心とした地域支援機能

○ 道央エリア

【入江貝塚、高砂貝塚（洞爺湖町）、北黄金貝塚（伊達市）、キウス周堤墓群（千歳市）】

① 縄文世界遺産推進室を中心に拠点機能を強化

② 道内資産が所在する市町と一体となって遺産の価値･魅力を発信

③ 誘客や周遊を促す道央の出発点として、道庁赤れんが庁舎、北海道博物館、道立埋蔵文化財センターをはじめ、駅や空港等の交通拠点を活用するなど普及機能を発揮し、道南エリアへの周遊を促進

④ 大学等高等教育機関と連携して道央エリアにおける地域活動等を支援

○ 道南エリア

【垣ノ島遺跡、大船遺跡（函館市）、鷲ノ木遺跡（森町）※ 関連資産 】

① 道南エリア（函館市）に新たな拠点を設置し、拠点機能を強化

② 道内資産が所在する市町と一体となって遺産の価値･魅力を発信

③ 誘客や周遊を促す道南の出発点として、青函交流に取り組んでいる函館市と連携しながら普及機能を発揮し、道央エリアへの周遊を促進

④ 道内資産と一体となった世界遺産教育等を通じて、保存と活用を担う人材を育成するなど、道南エリアにおける地域活動等を支援

＜主な意見＞

○ 教育･普及･研究について

（田代委員）

・ 見えない埋蔵文化財という強みを生かしながら、一般に対して北の縄文というイメージ、世界の縄文というイメージを拠点中心にしてつくり出していくのが拠点の役割だと考える。特に、縄文世界遺産はシリアルノミネーション なので、必ず北海道だけではなく、北東北も含めたイメージでなければならない。そのためにも道南エリアに拠点を置いて、東北とのアクセスの重要な拠点として発展させていく必要性はある。

・ 世界遺産教育はいろいろなところで実施されており、ここでしかできない教育を考える必要がある。最初に出てきた北の縄文、縄文世界遺産の価値を考えてそれを伝えていくことから、その教育をどこへ持っていくべきか。奈良では、ユネスコアジア文化センターが、木造建造物と考古学的な遺跡に対する研修を、毎年世界の専門家に対して行っていて、県も市も協力し、専門家を育てている。道南エリアの拠点施設でも、ここでしかできない何かしらの確立した研修を世界に対して行っていくことで、南茅部だから、縄文遺跡だから、縄文世界遺産だからできることで、特に教育・交流の拠点としての機能を果たした方がいい。

（西山委員）

・ 拠点となる施設に必要なものは、第１に学芸機能。また、中心となる学芸員の他に地域住民が色々な場面で活躍する。拠点施設での解説、遺跡の解説、場合によっては街中に出ていく。暮らしの中で展開している文化を説明するようなことを全部通して説明するガイドもできる。自宅で商売をしている方が、自宅で商売をしながら、拠点施設で学んだことに基づいて説明する。

○ 情報発信･誘客･受入体制

（西山委員）

・　縄文世界遺産として何を発信していくかが重要。かつての旅行は先人の事績や史跡を見学する、まさに教育旅行的であった。しかし、地域の方々と触れあう、食をいただく、一見縄文に関係なさそうなアクティビティでも、縄文を求めてきた観光客が、縄文を通じて地域を見たい、地域を通じて縄文を見たいというところに、うまく導くことができればよいと思う。

・　（地元の特産品である）昆布（のパッケージ）に、小さく「縄文時代から」と記載されていたが、本当にそのような説明が可能なのであれば素晴らしいと思う。多少こじつけであっても、人が「なるほど」と思うように説明することが大切。研究者からは学術的にそこまで説明できません、という話になるが、どこまで学術的に説明するのか、どこまで一定の飛躍をもって説明するのかを線引きする必要がある。

（水口委員）

・　縄文世界遺産に関心があるアドベンチャー･トラベルの旅行者層は存在する。ただし、縄文だけで３日間過ごすことは難しい。地元の生活文化に触れるような体験に縄文を結びつけたストーリーがとても重要。そのためには、従来の教育旅行を意識したものから、縄文世界遺産の価値の表現方法を見直した方がよい。また、そこに関わる仲間、地域の人を増さないと、地元の誰も関わってないようにしか伝わらない。一緒にやりましょうという話をし続けることが必要で、熱意と時間と労力がかかる。

・　受け入れ側が準備すべきことは多い。関係者の取組の機運を醸成、地元でお客様を歓迎しようという機運の醸成、縄文に直結するコンテンツの整備、縄文に結びつけて縄文以外を体験するコンテンツの整備。また、それぞれのクオリティーの向上、魅力的なガイドの育成、関係者が地元で繋がり合っていることも必要。売り出す方法、体制の構築、地元だけではできないこともある。きちんと取組主体や手順を分解して取り組んでいくべき。

・　旅行を造成する際のベースは地元の繋がり。それをトラベルデザイナーに相談しても手間がかかり、デザイナーが１件１件連絡して予定を組むことは難しい。地元の誰かが地域内で連絡調整を行い、トラベルデザイナーに連絡すると、デザイナーは世界的な旅行博で情報を出して、お客様を獲得する構造になっている。誘客機能を議論する際には、地元との繋がりをどのように構築するのかが最も大切である。

・　専門家が説明するのは素晴らしいことだが、対象となるお客様により考える必要がある。一般的にはガイドで十分対応可能であるが、ガイドの質が問題。海外では、ガイドは誇りを持っていて、ストーリーテリングの練習をしている。専門家は多くはないからこそ貴重。ガイドの育成も拠点機能の一つなのではないか。

（永原委員）

・　海外の方は、日本のことはほとんど知らないため、トラベルデザイン会社が主要都市以外にあと１カ所推薦することが多い。富裕層を取り込む上では、トラベルデザイナーやトラベルエージェンシーに認識してもらうことが非常に重要。

・　本当に日本の魅力を海外の方に知ってもらうためには、そして海外の方々が日本に来る理由、旅の思い出を振り返った時の一番のポイントは人。人というのは地域住民や、特定のことへの知識に長けていて、お話を伺って感動、そういった体験が、海外から来た旅行者の胸に刺さる。そのため、観光の拠点を作る時も、来訪者にどんな体験を提供していくのか、誰がどんな形で関わって提供していくのか、を考えなければいけない。

（第３回事例報告）
・　地域のパートナーと、経済が循環するようにしながら（経済循環型観光）、精神的に向上できる旅の造成に努めている。
・　函館市縄文文化交流センターを中心とした、南茅部エリアにフォーカスした縄文の旅を造成した際には、縄文というストーリーにより、バラバラだった魅力的な地域の観光資源、食やアドベンチャー体験、縄文の遺跡や博物館、全てを繋いで、価値の高いものに向上させた。
・　地域に還元していくための仕組みについては、国レベルでかなり議論され始めている。様々な関係者を巻き込み、行政で検討を進めていった方がよい。税に近い取扱いが一つの方法。
・　函館市縄文文化交流センターを貸し切りたかったが、条例で入場料が 300 円と決まっており、貸切料金の規定がないためできなかった。寄付で還元しようと考えたが、受入方法がない、どのように取り扱えばよいのか不明などという課題があり、循環させたくてもできなかった。これについては、法整備の問題も根深く、ダブルプライシングなどの議論がされているところ。私たち単体の旅行会社としては寄付を提案しているが、法整備が圧倒的に不十分で、かつ寄付した先の自治体等での使途が決まっていないと、あまり意味がない。
・　大前提として、旅を造成するにあたって、すべてを論理一貫させる必要はないと思っている。旅の中の幾つかのポイントで、縄文文化に学ぶ機会があれば十分。例えば、日本酒のツアーを作るときに、毎日ひたすら酒蔵行ったり、水田に行ったりするだけでは飽きてしまう。それと同じで、すべてを縄文色に染める必要はない。しかし、縄文というキーワードが登場した時には深い体験を提供したい。
・　それを提供するために不可欠なものが函館市縄文文化交流センター。私たちが旅行を造成した際には、発掘作業から展示まで、すべて関わっていた先生がいて、裏側のストーリーを話していただける、そこに他にはない価値があると思っている。そういったストーリーをきちんと提供できる場所とストーリーテラーがいることが大切である。

（木野委員）
（第３回事例報告）
・　観光戦略の視点は以下のとおりと考える。
①　『訪れる目的・期待感を増やす』『縄文＋縄文以外』の滞在体験メニューの造成。縄文・歴史に関心ない人にも、滞在体験の満足度を与えたい。
②　『自然、アート、食、アクティビティ、住民との交流』を通じた『異文化体験』の提供。縄文の精神世界に触れ、旬を食し、体を動かし、人と交流し、学び、異文化を五感で楽しむ。
③　『全域を滞在体験の舞台』とし、南茅部『ならでは』やユニークベニューを活かした周遊。１箇所に留まることなく、土地巡りの中でさまざまな体験が得られるようにする。有形無形に在る「地域ならでは」の掘り起こしと、幅広い創造的活用っていう視点。アートプロジェクトや縄文の世界観の役割は、本能、身体、直感に働きかけていくこと。固定概念がアップデートされていくような感覚が得られる旅、滞在体験を造成できるのではないかと思う。

（田代委員）
・　南茅部の拠点では、世界遺産になった縄文の価値をぶれずに伝える機能が大切となるが、そこでの専門家のあり方は、発掘から展示まで携わった専門家が複数いるということより、様々な分野の専門家がいて、その人達の良さを活かしながら、観光や地元の人たちと連携していく方がよいと考える。考古学者を中心に、何かを期待され過ぎても困るというのが私の意見。専門家は重要だが、連携の仕方は拠点中心に考えていただければと思う。

○ 地域支援･連携

（小林委員）

・　北海道の価値そのもの、あるいは自然遺産をどうするか、それから次世代を作る、街に住んでいる人だけではなく、その街に住んで何かチャレンジしたいという人と、世界の投資家とネイチャーポジティブのようなことを考えている人たちとマッチングさせる、それぐらいの幅でビジョンとマスタープランを考えていく意味と価値があるのではないかと思っている。【再掲】

（木野委員）

・　拠点形成には、地域や住民や私たちにとっての未来づくりという創造的な視点が欠かせない。遺跡の存在や歴史、縄文の多様な価値といった遠い過去の記憶や記録と、今を生きる地域の方々の営みや誇りを繋ぐのが大事なポイント。地域の方々が主役であって、共にこれからのストーリーやメッセージを作っていくという視点を持つことが、とても大事。

・　縄文だけ、世界遺産だけが輝いていくものではなく、地域の有形無形の文化資源を拾う必要があり、その中で、住民の方々にとってカックウ や縄文世界遺産が、今ひとつ宝になっていない、誇りになっていないということは、絶対に取り上げていかなければならない課題だと思う。それができるのが文化や文化芸術の力。

・　多分野の研究者や専門家、多種多様な分野を得意とする「多様な第三者」である方々がこの地域を訪れる環境やプログラム造成、それを受け入れられる体制や拠点施設、機能もあって欲しいなと思いますし、地域の人×地域資源×多様な第三者から見えてくる、地域の本物や潜在する魅力、未来的で創造的なアイディアなどを作り出していけるのではないか。そのためには多世代、多様な市民が多様なプログラムに常に参加することができるようにすべき。

○ 道南エリアにおける拠点の設置場所について

（木野委員）

・　場所が決まらないと具体的な取組の方向性や実施すべき事業の議論が進まない。そのため、道南エリアの拠点施設は、南茅部地区に置く前提で議論を進めていけたら良いのではないかと思っている。

　なぜ拠点施設は南茅部地区に置くべきか、遺跡やその背景となる自然と、今この地域に生きる方々の暮らしや文化を繋ぐことや、その共感力がこの計画の中ではすごく大事な欠かせないポイント。また、遺跡は以前からもこの先も地域の中に存在するもので、拠点形成は地域の未来をどう作っていくのかということであり、地域の方々と共に作っていく行動でもある。

（第３回事例報告）

- **拠点の形成にあたって、改めて南茅部を推したい。拠点形成の方向性として、大切と考えるイメージは以下のとおり。**
  - **①　縄文の世界観を多面的に深掘りした新しい見せ方、地域の風土資源を素材とした創造活動。その両輪を世界中、日本中の多様な人々の興味関心、心と体に響かせること。**
  - **②　南茅部のコアな拠点、地域全体＝サテライトが、多様な創造・研究・挑戦を牽引し、協働を後押しし、その創造性・魅力を世界へ発信し続ける。**
- **南茅部でのプロジェクトの有効性は４点あると考える。**
  - **①　潜在する資源の掘り起こし、創造と学び、地域の賑わいへ展開。**
  - **②　新しい繋がり・関わり、多様な協働を生み出し続けるのではないか。**
  - **③　次の１万年に向かう新しいストーリーをつくり始められるのではないか。**
  - **④　地域住民の主体性を育み、土地の誇り・郷土愛を醸成していくことができる。**

（西山委員）

・　今回の拠点施設が、このエコミュージアムのコア博物館にあたるものと考えると、その設置場所は、基本的にはポテンシャルのあるところ、地域の方々がしっかりと支えている機運があり、力があり、既存の活動があること。もうひとつ大事なのは、エコミュージアムは本格的な博物館活動で、単なる観光まちづくりではない点。学芸活動が充実していることが一番大事。そういう意味では、コアミュージアムを作るとしたら南茅部地区であるということは、大いにまず絶対評価としてはある。

　ただ、どのような仕掛けをしてコア施設に導くかといった全体システムの設計がなくして、どこに拠点施設を置くかという話はできない。きちっとした客観的な調査、一般的に言えばコンサルタントに専門的な調査事業をやってもらうべき。

（永原委員）

・　南茅部が拠点として望ましい理由については、山から海への自然の融合があり、川下りなどのアクティビティを想定した場合にも、水の下に遺跡が残されていたりして、縄文人の生活を感じることができたりする。縄文ストーリーを伝えていくことに適している。

・　ただ、宿泊施設や二次交通、ガイド人材育成の仕組みづくりなど課題も多い。

４　策定スケジュール（予定）

・令和６年６月　道議会第２回定例会前日委員会において、拠点形成方針（素案）報告

・有識者からの意見聴取
・市町村からの意見
・関係団体からの意見
・道議会における議論

・令和６年11月　道議会第４回定例会前日委員会において、拠点形成方針（案）報告
・令和６年12月　「北海道における縄文世界遺産の拠点形成方針」決定